



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 『栄花物語』贈答歌の物語機能：三条・城子贈答歌をめぐって                                                  |
| Author(s)    | 篠原, 圭織                                                                        |
| Citation     | 若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 69-72                                             |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/106325">https://doi.org/10.18910/106325</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『栄花物語』贈答歌の物語機能 ―三条・城子贈答歌をめぐる―

日本文学・日本語史学 博士後期課程一年

篠原 圭織

### 一、はじめに

『栄花物語』卷一〇「ひかげのかづら」には、城子立后をめぐる、三条天皇と皇后城子との二組の贈答歌が置かれている。

三条天皇即位の翌年頭、にわかに立后の話題が浮上するなかで、三条天皇は宣耀殿女御・城子と「おぼつかない」胸中を共有する。長年寵愛する城子か、道長を後見とする妍子か、立后問題を前に、三条天皇は道長に妍子立后の意向を伝えるも、道長は多子を理由に城子の立后を勧める。これに三条天皇が不満を示したことで、妍子に立后の宣旨が下され、立后問題は決着したかのように思われた。

ところが、妍子立后以降、三条天皇は城子をこそ立后させたいと考えていた。当の城子は立后に対し無関心な態度を貫くが、女房達はこのような城子の態度を批判する。そうしているうちに道長は城子立后を奏上、三条天皇は城子の父親である藤原済時が大納言で没していることを懸念するも、大臣の位を追贈することによって、城子は皇后に冊立されることになる。一条朝に続く二后並立である<sup>一</sup>。慶事として描かれる立后を経てなお、城子の心中に浮かんていた不安感が払しょくされることは無かった。

公家日記をはじめとする古記録を参照すると、このような立后問題の背景には、道長と三条天皇の激しい対立が存在することが示されている。城子立后に際し、道長の妨害とも取れる記録すら存在する。しかしながら、『栄花物語』においては、城子立后は道長の奏上によって達成される上、道長本人が、城子の望外の栄華を「女の幸ひ」と賞賛する。

福長進氏は、このような城子立后に関連して、二組の贈答歌が縁取る枠組みとして位置付けられていると指摘するが<sup>二</sup>、この二組の贈答歌を城子立后記事の枠組みと捉えた場合、贈答歌と城子立后はどのように関わり合うのだろうか。本発表では、二組の贈答歌が立后問題の始発と終着に配置される構成を踏まえたくえて、枠組みの配置の意義を検討する。

### 二、贈答歌①

まず、一組目の贈答歌について検討する。本発表内では、立后問題の始発に置かれている贈答歌を①、終着に置かれる贈答歌を②と呼称する。

さて世の中には、今日明日、后にたたせたまふべしとのみ言ふは、督の殿にや、また宣耀殿にやとも申すめり。

<sup>一</sup> 一条天皇には皇后・藤原定子、中宮・藤原彰子と、二人の后が存在する。本来皇后と中宮は別称に過ぎず、一人の天皇に二人の正妻が同時に存在することとなった。

<sup>二</sup> 福長進「第五節 明暗対比的な構成『歴史物語の創造』笠間書院、二〇一一年

かかるほどに、宣耀殿に、内より、

春霞野辺にたつらんと思へどもおぼつかなさ隔てつるかな

と聞えさせたまへれば、御返し、

霞むめる空のけしきはそれながらわが身一つのあらずもあるかな

と聞えさせたまへれば、あはれと思しめさる。

(巻第一〇「ひかげのかづら」①五〇〇頁<sup>三</sup>)

立后問題の出来に続いて、三条天皇は宣耀殿・城子に、春霞が野辺に立つ季節だろうと思うが、「おぼつかなさ」に隔てられている、と詠んだ和歌を送る。対する城子は、霞のたなびく空の様子は変わらないけれども、自身の身だけはすっかり変わってしまったと返す。返歌を受けた三条天皇は、城子を不憫に思う。

野村倫子氏は、この贈答歌が詠まれた時期、三条天皇の側には妍子が侍っており、城子の参内が思うように進まないことなどを踏まえ、「春霞」による「隔て」を居所の隔たりと解釈する。会うことの叶わない哀切を詠んだ歌とする三条詠に対する城子の返歌も、以前のように会うことのできない、寵愛の変化を嘆く贈答歌であるとして、引き裂かれた男女の悲哀を位置付けている<sup>四</sup>。

ところが、三条詠の「たつらん」は推量表現であり、贈答歌①の時点で霞がすでに二人を隔てていると読むことにはなお検討の余地がある。むしろ、三条詠はこれから「霞」が立つことを予見し、そのことによつて生じる「おぼつかなさ」を詠んでいると考えられる。さらに、贈答歌の直前に「今日明日、后に立たせたまふべし」と、妍子と城子のいずれを立后させるかという問題が浮上したことが明示されており、贈答歌直前の本文は、実質的な詞書として機能していると言えるだろう。

このような物語上の配置を踏まえれば、三条詠の「おぼつかなさ」は、単なる現在の物理的な隔たりを示すものではない。また、単純に城子と会うことが出来ない哀切の歌として解釈するのではなく、立后問題の浮上によつて今後生じうる状況の不透明さをも含意する歌として解釈する必要があるだろう。三条詠の解釈を踏まえるならば、これに応じる城子の「わが身ひとつのあらずもあるかな」についても、三条からの寵愛が薄れたことへの哀傷としてのみ理解する必要はない。『栄花物語』において城子は、妍子参入に際して大きな動揺を示さず、皇子女のことに関心を向ける人物として描かれている。そうした人物造型を念頭に置けば、ここでいう「我が身」の変化は、寵愛の変化そのものではなく、直前に示された立后問題を受けて、城子自身を取り巻く立場が従来とは異なるものとなったことを示す表現として捉える余地がある。

三 『栄花物語』本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。

四 野村倫子『栄花物語』に見える皇后宮城子叙述の方法―付：二組の贈答歌を廻って―『古代文学研究 第二次』二四  
巻、二〇一五年一〇月

### 三、贈答歌②

三節では、立后問題の終着に置かれた贈答歌②について検討する。

かくよろづにめでたき御有様なれども、皇后宮には、ただおぼつかなさをのみこそは、  
尽きせぬことに思しめすらめ。同じ御心にや思しけむ、内より、

うちはへておぼつかなさを世とともにおぼめく身ともなりぬべきかな

とある御返しに、

露ばかりあはれを知らん人もなおぼつかなさをさてもいかにと

よろづの中にも、姫宮の御ゆかしさをぞ思しめしける。

(巻第一〇「ひかえのかづら」①五一〇頁)

城子は、立后を果たし「女の幸ひの例」と称賛されたにもかかわらず、なお不安感を抱えていることが語られ、同じ胸中を抱える三条天皇より、再び歌が贈られる。ここでは贈答歌①と同様に「おぼつかなさ」の語が詠み込まれ、城子の返歌には、①では詠み込まれなかった同語が共通語として詠み込まれている。城子立后という一応の決着を経た後にも、三条と城子の間に不安や不透明さがなお残されていることが示される。

加藤静子氏は、通底する「おぼつかなさ」について、道長の強大な政治的影響力を背景とする三条天皇の抱える将来への不安が含意されると指摘しており、贈答歌を掲載することによって道長との緊張関係を明示しない中に、三条天皇の苦衷がほの見えてしていると論じている<sup>五</sup>。

氏の指摘による通り、贈答歌②の「おぼつかなさ」も、三条・城子間の私的な交際の問題に限定して理解することは難しく、とりわけ、三条詠が「世とともに」「身ともなりぬべきかな」と、今後も持続していく不安を詠んでいる点、また城子も「さてもいかに」と、その不安を解消しえないものとして応答している点に注目される。立后問題が形式上は決着しているにもかかわらず、贈答歌①で三条天皇によって提示された「おぼつかなさ」は、ここでもなお継続しているどころか、城子に至っては返歌に詠み込まれることによって深化していると言える。

### 四、城子立後の枠組みとして

贈答歌①・②を一連の枠組みとして考えた場合、注目されるのは、両者に共通する「おぼつかなさ」の継続だけでなく、その間に位置する城子立后を契機として、「おぼつかなさ」を抱える城子の立場が変化していることである。贈答歌①では、立后問題が浮上するなか、三条天皇から送られた歌に対し、城子は「わが身一つのあらずもあるかな」と、自身の「身」の変化を詠み返している。直前に妍子と城子のいずれを立后させるかという問題が提示されていることを踏まえれば、ここでいう「我が身」の変化は、三条天皇からの寵愛の変化

だけではなく、城子自身が立后問題の当事者として、従来とは異なる立場に置かれたことへの認識を示すものと捉えられよう。

これに対し、贈答歌②では、まず立后を果たしたにもかかわらず不安を抱える城子の姿が示され、それに共鳴する相手として三条天皇の歌が続く。すなわちここでは、三条天皇の苦悩に城子が応答するというよりも、皇后となった城子自身の「おぼつかなさ」が先に提示され、それを三条天皇も共有するものとして叙述されているのである。

こうした二組の贈答歌の推移を踏まえると、城子は単に三条天皇の寵愛を受け、あるいは三条天皇の政治的苦悩を共有する存在としてのみ描かれているのではない。贈答歌①では、立后問題の浮上によって変化した「我が身」を認識し、贈答歌②では、実際に皇后となった身に生じる「おぼつかなさ」の主体として描かれている。ここには、立后を契機として城子自身が皇后という地位に伴う重さや不安を自らの問題として受け止めるようになる過程を見出すことができるのではないだろうか。

## 五、おわりに

以上、本発表では、城子立后をめぐる二組の贈答歌を、一連の記事を枠づけるものとして捉え、その物語的機能について検討した。城子立后をめぐる政治的な経緯は、三条天皇や道長らを中心として進行し、城子自身はその決定過程に積極的に関与する存在としては描かれていない。しかし、立后問題の始発と終着に置かれた二組の贈答歌に注目すると、そこには、立后によって変化する自らの状況を認識し、立后後には皇后としての「おぼつかなさ」を自ら抱える城子の姿が示されている。

すなわち、二組の贈答歌には、城子立后を枠付け、立后問題によって自身の「身」の変化を認識する城子から、立場に伴う「おぼつかなさ」を抱える当事者となった城子という推移を描き出す機能があると考えられる。立后問題自体の進行に参与しない城子を、その結果を引き受ける当事者として物語の中に位置付ける点に、二組の贈答歌の枠組みの配置の意義が認められることを明らかにした。